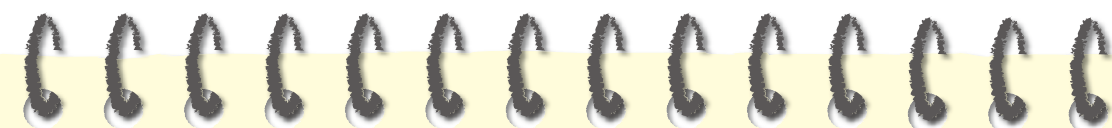




制作者たちは、統合失調症という病を抱え長期入院をし、闘病期間の中で自身の“回復”をあきらめていました。制作者たちの中には閉鎖病棟での生活を余儀なくされている人たちもいます。こうして長く入院してきた人たちが、作業療法や心理教育を通じて出会った仲間の中で、抱きながらも口に出せなかった“夢”を陶板という形で表現してくれました。制作者たちにとって“夢”とは、今まであきらめてきた“回復”へと向かう羅針盤であり、“回復”の先にある「夢のかたち」です。“夢”という難しいテーマに、手が止まったり悩むことも多かったですが、自分たちの目標を形にするために最後まであきらめずに取り組みました。完成したときのみんなの顔は、輝いていてとても嬉しそうでした。自分自身の“夢”を制作することで、それぞれの“回復”への第一歩を踏み出したのです。（担当 OT：泉 侑希）



今月の作品

本コーナーでは、表紙にご応募いただいた作品の中から毎月1点をご紹介します。



中西泰子「庭の山茶花」

頸椎損傷からの障がい者になり30年間経ち、70歳になりました。足の指の激痛から少しでも解放されたいという思いで絵を描いてみました。クレヨン、カラーボールペン、色鉛筆と使ってみました。手に補助具をつけての色替えに手間がかかり、水彩が一番作業の負担が少ないので、水彩画になりました。絵に集中できるのは40分くらいで、車いすの姿勢が辛くなり、手を後ろにかけたり、あご肘を付いたり、座位が保てず疲れますが、心地よい充実感に満たされます。厳冬の中に咲く山茶花を愛しく思いながら、4カ月くらいかかり仕上げました。